

鳥取県青少年育成アドバイザー協議会通信

鳥取県青少年育成アドバイザー通信 28号
鳥取県青少年育成アドバイザー協議会
発行日 2001. 9. 27
編集 芳村恵子
〒680-0002 鳥取市浜坂東 1-10-15

「就任挨拶」

森岡 敏人

去る7月15日、青少年育成アドバイザー協議会の総会で事務局長にと…。弁明の効なく拝命することになりました。

平成14年11月23・24日に第8回中国・四国ブロック青少年育成アドバイザー連合会の研究集会が鳥取県の番で、米子市皆生で開催予定ですから、そうした絡みもあってのことかと、ストレスを覚えてしまいました。

清水成真前事務局長、卓越した行動と処理能力を持つ方の後を受けての仕事ですから、ご迷惑をおかけすることが多いことと思います。悪しからずお願いします。

かくなる上は意を決し、微力ながら、高橋譲会長・井上廉女幹事長・先輩諸氏の鞭撻ご指導を仰ぎながら、仕事をまっとうすることです。何かと力添えを宜しくお願いします。

生来、不器用な私が、曲がりなりにも戦力の末端に加わらせていただきました。

青少年を取り巻く環境・情勢は年々厳しさを増す時、第8回中国・四国アドバイザーの研究大会を目前にこれを契機として、鳥取県青少年育成アドバイザー協議会の役割・機能・在り方そのものが、皆さんと共に問いながら、少しなりとも明るくなればと考えています。

「どうぞよろしく」とお願いし、就任の挨拶といたします。



「こんにちは、近況報告です」

芳村 恵子

1999年8月、約16年間働いた職場を辞め、本来の助産婦としての仕事に夢を求めて、新天地での再出

発を始めました。

今まで、携わってこなかったさまざまな仕事、関わりの無かった方々との出会いは、新鮮かつ緊張の連続でもありました。確かに身体はきつく、休む暇も無いほどでしたが、実に楽しい日々でした。



そんな日々でありながら、1年目を迎えた時、3年にも4年にも感じたため息が出たことがありました。それは、東ね役という役割の奥深さでした。何しろ、知らない者ばかりが集まって、その一人一人の経験や知識や技術を寄せ集めてゼロから作り上げるのですから、それは大変な作業でした。

そんな時こそ、職場の雰囲気、仕事の良し悪しに随分影響するものです。サービス業の誰もが目指す、お客様に満足を感じてもらおうという目標は、提供するものの心の安定が無ければ、叶えられないものです。そのためには、職場の「心地よい人間関係」作りがしっかりできてこそ、成り立つものだと思います。

という、随分悩みが多かったと白状してるようですね。ふう……。

それから1年、軌道に乗ったところ、見直しに入ったところ、何より「心地よい人間関係」の中で、仕事のできる喜びを感じつつ、3年目を迎えています。「石の上にも3年」、一つ目の節目の年を乗り切るものにするために、もうひと頑張りします。

ところで先日、青少年育成アドバイザーの総会に久しぶりに出席しました。2年振りだと言うのに、そして始めてお会いした方もあると言うのに、まるでしょっちゅう会っていたかのような近親感を覚えました。それは、今まで培った「心地よい人間関係」と、通信の編集に携わらせて頂いていたお陰だと思いました。

まだまだ、十分な活動はできませんが、私にできる精一杯の役割をこれからも努めさせて頂きたいと思います。

とっどりの 青少年

No. 108

平成13年9月発行

編集・発行

青少年育成鳥取県民会議

〒680-8570 鳥取市東町一丁目271

鳥取県生活環境部 県民活動推進課内

TEL 0857 (26) 7078



親の勘違い

二人の子どもの母

主婦 渡邊和子(米子市)

子どもが20歳になるまでは親に責任と義務があると言います。それは、20年間子どもを守ったり、躰をしたり、世の中へ一人旅をさせても大丈夫と巣立ちを促すまでの責任であり、何も食事を与えたり、良い服を着せたりするだけではありません。

それはごく当たり前の事であって、根本は子どもに対して、①生まれてから3歳まで、②3歳から小学校入学まで、③小学校を卒業するまで、④中学を卒業するまでの、それぞれの時期をどう育てたのかを親自身が素直に振り返ってみると、過ち、曖昧さ、手抜きなど沢山の反省点があるように感じます。子どもは親の素質、性格、などを受け継ぎ、表面的には真っ白で無の状態生まれて来ます。その我が子を白紙に絵を描くように、自分で思うように育てるから、本当はよく分かっている筈なのに、仲々うまくいきません。何故、育てるのが困難なのでしょう。

子どもは親の見本であり、親は子どもの手本です。今、問題になっている「子どもの荒れ」は、親が大きな勘違いをしたまま育ててきた証し、育て方の間違いの見本だと思います。子どもは親をよく知っています。親に不足しているものをチェックしています。こんな親だったらいいのにと、理想の親を求めています。子どもは親を選ぶ事ができないので、我慢しています。親は自分の誤りに気付いて、目を覚まし、大いに反省して素直になる事が必要です。子どもが悪いのは社会のせいだとか、学校のせいだとか、人のせいにしての間は、子どもを立ち直らせる事は出来ず、親が変わらずして子どもを変えたり、立ち直らせる事など出来ません。一番の反省点は、親が一番しなくてはならない「心の教育」を子どもにしていけない事だと思います。

今、本音で子どもに恥じることなく目を見て語る事が出来るのでしょうか。子どもの年齢に置き換えて理解しているのでしょうか。理解ある、わかった親を演じて

はいませんか。子どもは親が隠して見せない心の中、親が隠して話さないでいる心の中を全部見えています。子どもは、親の体の一部のようなものです。いつの間にか出来のよい親を演じている事を子どもは心の中で軽蔑している事でしょう。親が一番しなくてはならない「心の教育」とは、嘘をつかず、本当の気持ちや考えを素直に表現することです。子どもが肌で感じられる教え方で育てる事だと思います。本物のお母さんの育て方が、子どもの心を動かし、子どもを立ち直らせる一番の近道だと思います。

母親は子どもを育てる上で、とても必要な人物です。ゆったりと冷静に現実と向き合い、母から子へ伝えていくことが重要かと思えます。青少年を考える時、母親を切り離して考えられません。

今、何をどうすればいいのかわかっていない母親が多いのではないのでしょうか。とても小さな事なのですが、①手料理を作る。②いつも優しく子どもと向き合う。③子どもの鏡、もっと子どもを意識して育てる。④本心を語る。⑤家庭の中を上手にきりもりする。⑥夫婦仲睦まじく、夫を尊敬する。⑦笑顔を絶やささない。など。また、子どもにとって、①安心できる家庭、②待ちどおしい食事、③楽しみな食卓、④早く会いたい母、⑤甘えたい母、⑥話したい母、ごく当たり前の事ですが、実践してみてもいいかがでしょうか。

子どもにとって一番大切で、一番必要なのは、母親の豊かな愛情と優しさなのです。決して甘やかすものではなく、いくら叱っても基本がしっかりしていれば、子どもはとても素直に納得できるのです。

現代のお母さん方は、とても忙しくて、ゆとりがないかも知れませんが、子どもにとっては、かけがえのない親です。もう一度、我が身を振り返り、間違いない子育てを真剣に考えてみませんか。

<お詫び、紙面の都合で、一部割愛・修正しました>

今年度も私たちの「遊び」と名付けられた実践研究紀要が発刊され、研究の発表と情報交換の場が与えられました。“継続は力”慶びにたえません。関係する皆さんの努力と苦勞に深く感謝申します。

ところで、バブルがはじけ景気悪化の昨今、特に顕在化し、誰も否定できない事態として気になることは、人間形成や人としての社会化に異変が生じ、拡大してきたことです。マスコミが報じる様々な事件を通し、痛感させられます。やはり、高度経済成長期1960年(昭35)以降に生まれた、実感のない実態があると思うのです。

急速な都市化に伴う生育環境の激変もありました。家電用品・自家用車・電話・パソコンなどなどの普及によるライフサイクルの変化、個性・個の尊重をうたい過ぎて、「他者の消失」などと、忘れ去られ落としてしまったかけがえのないものもあります。情報産業・サービス産業の発達は、いつの間にか実体験の機会も著しく減少させました。産業の進展は、人々の価値観にも変化をもたらしたのです。

社会の急速な変化が、そこに生まれ育った者の人間形成や社会化に異変をもたらしたとしても不思議ではありません。深刻さを増した青少年問題も、あながち17歳周辺にとどまらず、やはり1960年以降に生まれ育った30歳代後半まで広げて、その言葉に共通する特性を把握することは大切ではないでしょうか…。

私たちは、子どもの健全育成を願い、より良い社会を思い描く時、また望ましい育ちを支えるためにも、実践の在り方や方向性を社会の問題事象からも探り、いかに具体的に提示していくかを考えましょう。

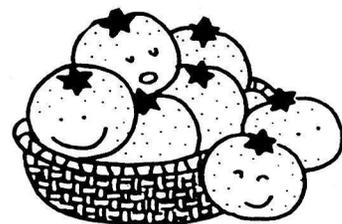


人類は開けてはならない「パンドラの箱」を開いたのかもしれませんが、仕方なしとし、傍観的に見て追従するのか、箱の底に残ったと伝えられる「希望」に託して努めるのか、いまは、その分岐点にあるのが教育ではないでしょうか…。幼児の表出する日常的な課題行為・行動の背後に注視し、広い視野と洞察力を持つことが臨まれるのです。

児童虐待防止施行2000年11月20日以降でも、いたいけない子どもがすでに100人近く虐待死させられています。全国200か所近くある児童相談所に持ち込まれる表立った件数にしても、約1200件以上とうなぎのぼりで、とりわけバブルが弾け景気の低迷期の急増には目を見張るものがあります。

十代の少年たちが大人世代に攻撃・暴発するだけでなく、20・30代の若い親がわが子に暴力を加えて死傷させる現実、どうみたらいいのでしょうか。丹念に考察し、その共通項を私たちは見逃してはならないのです。

いまは、既成概念にとらわれず、私たちは互いに事実を示し合い、場に応じて『一步出るのはか、一步引くのか』、『その一步は大きくか小さくか』、『強くか優しくか』と、細やかな配慮で共通する病理の芽に私なりに対応していきたいものです。偏狭な教育現場人のそしりを招かないよう、子どもに学ぶ姿勢と相互に検証し合う同人と結んで…。



ところで、気になる心のありようを二、三拾っておきましょう。

いつの時代にも異議を唱えて突っ走る若者がいました。実はその力が過去、社会や歴史を突き動かしてきたのでした。しかし、昨今の若者はどうも質的に違うようなのです。

ひとつには、社会化が欠損している青少年が多くなったと感じるのです。つまり、現実認識が稚拙な若者です。リセットボタンの一押しで、死から蘇り、又やり直しのできるゲームに幼少から親しみ熱中してきました。こうした環境の中で、「生命の一回性」の認識は薄くなり、現実と虚構の区別は混濁・消失していったのではないのでしょうか…。衝動的で行動にストッパーがきかない事件の数々に、痛さを感じます。「生命とは？」の問いに小学生の答えは、「シャープペンの芯」「ミニ四駆のオモチャの電池のようなものだ」…と。

また、“人生を生きることは、苦しいことも伴う”という現実経験や認識にも乏しいのです。私たちは振り返ると、逃げようとしても逃げられない苦しい現実対応が幾度かあったと思います。人生とはそんなものなのです。

しかし、少子化や核家族化は、お膳立て・路線引きの、育ち環境です。親などの手助けで安易な乗り越え現象が、いつの間にか「性」となっています。挑戦の場も挑戦力も無くしていったと思うのです。少子化は理屈ではなく、社会性や自立を遅れさせる結果となっています。フリーターの量産現象も、あながち不況のせいのみでないようです。

耐性の欠除にしても、苦しさに耐えて小出しにしたり、別方向へエネルギー昇華をしたりできないのです。もともと衝動の制御装置など育ってないのですから、「キレた」「キレる」などと言えないと思います。「むかつく」にしても、いと易く暴走・暴発する若者の短絡的行動から、かっこうをつけた造語のようなものです。



矛盾した考えや情念を同居させていても、決して行動破綻は起こさないのが、健康な心をもった人間だと言えるのです。

選挙ではないが、全国一区現象も気になります。渋谷や原宿でルーズソックスが流行すると、一週間もせずして、米子のデパート・スーパー・コンビニの周辺にたむろする若者のスタイルに出現する。厚底靴・キャミソール・リストバンド・腰バンドスタイルなどなど…。流行やファッションに敏感なのか、それもあるでしょうが、酒鬼薔薇少年Aの「ボクは透明人間」との言葉、また爆発的普及の携帯電話・iモードにはまり込んでいる街での姿に思うのです。

若者は、空虚感や孤独、不安や不満のような「心の飢」をしきりに癒しているのではないのでしょうか。そして、「限りなく同じである」ことに、何となく安心を求めているのでしょうか。フィーリングの合う仲間のなかでのみ、かろうじて安住しているのです。

気の合う仲間では、文句の付けようがない。しかし、逆に合わないとすぐに弾き飛ばされる恐怖や、仲間から抜けることの怖さもある。排他的性格も強い、心の交流も表層的であって、親友ごっこの演技や、気分や乗りで集団が保たれている。イジメに内在する心理でしょうか…。

子どもの育ちを思う時、「裏目に出ても耐える子」「友だちと関わり友だちが作れる子」「自分のことは自分で決められる子」「良いもの・美しいものに共感できる子」…と、成長に応じながら取り合えず願う

のです。お題目はもう結構のはずでした。ごめんなさい。

豊かな社会とは、豊かな人の出会いとよい人間関係に裏打ちされてこそだと思います。パンドラの箱に残った「希望」にかけて、共にまた実践に夢を馳せましょう。

*平成13年8月他の会のためにお書きになった原稿を読ませて頂き、当会員の方にも掲載させて頂きました。

お知らせ



*とっとり県民カレッジ連携講座

『新世紀 輝こう！自分らしく』

<内容>

日時 平成13年10月13日 9:00~12:40

会場 鳥取県民文化会館 梨花ホール

内容

<記念講演>

『映画が描いた 日本の家族』

講師 篠田正浩 (映画監督)

<ヒューマン フォーラム>

『いま家族とは』

コーディネーター 小玉美恵子 (武蔵大学教授)

パネリスト

篠田 正浩 (映画監督)

宮川 花子 (タレント)

徳永 進 (鳥取赤十字病院内科部長・作家)

吉永みち子 (ノンフィクション作家)

主催 財団法人民間放送教育協会・鳥取県他



編集後記

休みたんびの大雨で伸び伸びになっていた運動会や稲刈りも、ようやく終わりました。

<秋>秋空がアキラカ (清明) であるところからか。一説に、収穫がア (飽) キ満チル意、また、草木の葉のアカ (紅) クなる意からとも。 広辞苑

秋空に負けにくいくらい澄んだ心と、収穫を思い切り堪能できる身体でありたいものです。

次回は12月発行予定です。原稿お待ちしております。